

Title	〈書評〉『日本タイル博物誌』 阿木香,日野永一,新見隆,山本正之 株式会社LNAX1991年
Author(s)	足立,裕司
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 137-139
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 『日本タイル博物誌』

## 阿木香,日野永一,新見隆, 山本正之 株式会社 INAX 1991年

『日本タイル博物誌』は昨年の『日本トイレ博物誌』に続くINAXによる『第三空間選書』の第二弾として企画されたものである。これらに先立つ『美の彷徨――テラコッタ』や最近の『レヒネル・エデン』、さらに「INAX ギャラリー」の企画に合わせて出されるブックレットを併せるとかなりの図書がINAX(かっての伊那製陶)から出版されていることになる。

ブックレットの方はすでに企業の特色を活かした企画から、より一般的な内容へと移っているが、単行本の方はまだ企業活動の周辺という感もあり、それが逆に一般の出版社では気付かないユニークな企画を生み出す原因ともなっいる。この『日本タイル博物誌』もタイルの歴史と様々の実うを紹介しているのであるが、会社史のようなところはなく、むしろタイル文化史ともいうべきものを浮き彫りにしようとしているところは好感がもてる。一般の人には何気ない存在であるタイルが、写真や論説を通じて身近な存在となり、それがひいては全業イメージの形成にも役立つという方針であろう。

さて、本題の『日本タイル博物誌』であるが、ここでは「タイル」という対象に少し限定が加えられている。まず、日本で使われている事例に止めているいること、戦前のものに限っていること、それと最も大きな特色は「日本のタイル」という面に着目し、その源泉を遠くセンや瓦の歴史にまで逆上っていることである。このような限

定は戦後のテクスチュアとしてのやや単調なタイルの使い方を考えると頷けるし、海外の多彩な事例を扱うには紙面が限られているからやむを得ない選択であろう。ギャラリーのブックレットではビクトリアン・タイルなども企画されており、そのうち海外編が出版されるのかもしれない。

内容は最初に54例のカラー写真構成によ るタイルの使用例の個別解説があり、つい で3編の論説が掲載されている。日野永一 氏の「"日本のタイル"の誕生」,新見隆氏 の「ヴァナキュラーなユートピア---近代 日本の住宅とタイル」、山本正之氏の「施 工の変遷から見たタイル史――裏から支え た職人たち」である。日野氏の論文は日本 におけるタイルの歴史を遠く逆上り、日本 の古代に中国から伝来する磚や瓦, 江戸の 本業敷瓦から明治期の西洋タイルの伝来と その融合・普及まで「日本のタイル」の歴 史を概観しようとする力作である。新見氏 の論文は本題のタイルとはやや論旨が外れ ているかのようにみえるが、ほぼ近代日本 の住宅史に尽きている。山本氏のそれはタ イルの施工に伴う実務的な説明が一般向け になされている。山本氏は全国タイル業界 の会長を務めるなど専門のタイル販売業の かたわら、江戸時代を含む貴重なタイルを 蒐集されたコレクターでもある。

全体としてはタイルという多彩な素材を 何とか絞り込んで一冊の本のなかに捉えよ うとする苦心が窺えが, 瓦からタイルへと いう「日本のタイル」という視点と, 新た は必ずしも一致しているわけではない。や はり事例としては比較的新しいタイルが主 流となっており、なまこ壁や塼と一緒にす るとなにか落ち着きが悪く感じられる。そ れは山本氏の明治以前のまさに「日本のタ イル」と言うべき貴重なコレクションの扱 いが二次的になっていることにもよる。

実はこのようなテーマと内容のズレが生 じた原因は、すでに INAX ギャラリーで行 われている『日本のタイル』展と同名の ブックレット(1983年10月出版)との違い を出そうとした結果と思われる。このブッ クレットでは「日本」に重点が置かれてお り、上記の山本コレクションを主体として る。逆にこの書では企画としての新味を狙 うあまり、逆に内容の混乱を招いたとも言 えよう。先行のブックレット中の対談にお いて村松貞次郎氏が「装飾タイルだけの系 譜をたどれば、江戸から明治へと、かなり スムーズにつづいていると思うのです」と いう感想とちょうど裏腹な印象を招いてい るのは、やはり外装タイルやモザイクタイ ルを含めた、やや盛り沢山な内容のためで あろう。

おそらく、タイルという素材は西洋の源 泉としては石の代用品というところに行き 着くであろうし、この書で扱おうとしてい る「日本のタイル」の焼き物としての源泉 とは少し感覚を異にすると考えられる。外 装タイルは化粧煉瓦、煉瓦、石というよう は江戸時代の茶道具に象徴されるように焼 き物としての装飾性、絵付けや釉薬の技術 に収斂していく。その二つの流れが明治と

に捜し出したという実例を含めて54の事例 いう時代に重なり、西洋化していくわけで あるから、「日本のタイル」の歴史に重き をおくなら、あまり外装タイルやナマコ壁 などに触れずに装飾タイルに徹したほうが 良かったと思われる。

ただ、タイルといえば浴室やキッチンに 用いる内装タイルか,外壁に張る外装タイ ルというように思い込んでいる建築界の一 般常識を考えると、前回の『日本のタイ ル」のように絞り込むには単行本としては 一般性に自信が持てなかったのかもしれな い。また、風呂屋の富士山のタイル絵とか 暖炉まわりの使用に事例が集中するとなる と、このようにまぜこぜにして並べるのも 一つの編集方針であるのかもしれない。た 視点に新鮮味もあり、まとまりを持ってい だし、それならそれで、なぜテラコッタに 触れないのかとか、どうみてもタイル張り に見える化粧煉瓦石やタイルと同様な用い 方をするテラゾ・タイルなどになぜ触れな いのかという疑問が生じてくるのも偽らざ る印象である。あるいは、外装タイルやモ ザイクタイルとなるとその使用法, つまり 設計者の比重が重要となるはずであり、そ のあたりに配慮を欠いているのも物足りな いところである。日野氏のタイルの製作と その歴史があり、山本氏のタイルの施工法 が述べられているのだから、できればそれ を用いる建築家の側面からの記述が望まれ たところである。

やや内容よりも本の構成に話が集中する ことになったが、こうした図書を理解する にはどうしても独立の編集事務所の果たす に遡及されうるのに対し、「日本のタイル」 役割が無視できない。出版界の事情にはそ れほど明るくないが、この書を企画した入 澤企画制作事務所のような出版企画・編集 会社が急成長していることは確かなようだ。 私が関与したものだけでもこうした編集企 画会社が扱う出版物は結構多く, いずれも 相当グレードの高い出版物を出しているの が注目される。これらの編集事務所の多く が何らかの形で企業誌の発行に関係してい るらしく、安定した基盤のうえで、既存の 出版社にはできないユニークな企画を練っ ているのだという。確かにこの本でもそう した編集事務所の企画した特色がよく現れ ていると思われる。それは出版そのものの 動機がこれまでのように著者からの持ち込 みではなく,企業からの委託によって企画 をたてることであり、著者はその企画に合 わせて最も適当な人選が行われるとこうこ と、あるいは従来の出版社が著者に一任し ていた取材等の仕事を代わって編集事務所 が行うこと。思い切った企画が可能であり、 従来の出版企画が専門家向きか一般向きに 分化していたものの中間が狙えるなどの特 徴があると思われる。

この本でも54例にのぼる建物の取材・撮 影は編集事務所ないしはフリーの著者が 行っており、この種の出版企画の機動性が 伺われる。実は、この書で扱われている阪 急三宮の壁画などはアールデコのモザイク の好例として私も眼をつけていたものであ るが、あまり知られていなかっただけに何 処かに情報の提供者がいると思っていたと ころ、実は全国のめぼしい個所に電話をか けまくり、見つけたものだという。こうし た作業自体、これまでの受け身の編集者と 異なり、やや雑誌編集作業に近いものにも 見受けられる。ある意味ではこうした編集 事務所はこれから益々活躍するであろうし、 書物のあり方にも変化を与えていく存在に なるように思われる。ただ難を言えば、自

由度とは逆に一般受けする編集技法に頼り すぎる嫌いがあり、出版の依頼者の方を向 きすぎる場合もあるようだ。

最後になったが、本書のなかの幾つかの 疑問点を挙げておきたい。一つは事例紹介 において煉瓦の表面に釉薬をかけた化粧煉 瓦とタイルを厳密に区別していないことで ある。私の経験でも明治期から大正期のも のは、ほとんどタイルと見間違うようなも のでも取り出してみると化粧煉瓦の場合が 多く、注意を要する。それと旧二条陣屋の 浴槽は後の補修ではないかと思われること である。それはタイルが剝がれた部分はど うみてもモルタルであり、この当時は防水 性をもった目地材がなかったはずだからで ある。

ともあれ、この書は博物誌というタイトルにもあるように、気楽にページを繰っていくのも一つの見方であろう。そこに感じられるのは、日本におけるタイルの使用法が控えめなことである。ときに和風のなかに執拗な追求も見られるが、それでも陶器で部屋全体を覆い尽くすといったヨーロッパのような傾向はない。レヒネル・エデンやガウディのような徹底したモザイクの使用例も無い。それは、丁度日本人建築家が色大理石を使わず御影石を好み、モダニズム以降もモノトーンを好むということと共通する素材感覚があるようにも思われる。

(足立裕司 神戸大学)